

3／暦応元年（1338）、光明天皇から征夷大将軍に任じられ、室町幕府を開いた。ここに名実ともに武家の棟梁となったのである。

幕府の基礎固めをしようとする尊氏は、清廉で厳格な性格の弟・直義との二頭体制をとり、尊氏が軍事の指揮権を掌握し、直義が政務の全権を担った。

南朝が徐々に弱体化していくと室町幕府政権は安定する。だが、むしろここからが尊氏の新たな苦難の始まりだった。身内の内紛が表面化したのだ。

尊氏を軍事面で支えていた執事・高師直が直義の権限拡大に反発し、両者の対立が深刻化すると、尊氏を抱き込んだ師直が一度は直義の追放に成功する。しかし、直義は南朝と結ぶという旋破りの手段で反撃に出た。直義が南朝軍とともに挙兵すると、尊氏は師直について戦うが敗れ、高師直・師泰兄弟は殺害されてしまった。

こうして高一族は滅亡したが、尊氏と直義の関係はもはや修復不可

能なものとなっていた。両者の溝が埋まることはなく、この後は尊氏と直義の実の兄弟による争いとなっていく（観応の擾乱）。

直義討伐の意志を固めた尊氏は正平6／観応2年（1351）、今度は自らが一度南朝に降って和睦。南朝という後顧の憂いを断つたうえで、鎌倉にあった直義討伐に出征した。そして、直義軍を破って鎌



室町幕府を開いた足利尊氏（浄土寺蔵）

倉を占拠し、直義を鎌倉延福寺に幽閉する。直義は幽閉された翌月に黄痘という病で急死するが、『太平記』ではこれを尊氏による毒殺としている。いずれにしても直義の死で擾乱に終止符が打たれたかに思われたが、政局はまだ安定しなかった。尊氏・直義兄弟

足利直義  
（1306～1352）

足利尊氏と同じ父母から生まれた1才違いの弟。政才に優れ、室町幕府成立後は実質的な執政者となる。鎌倉時代からの伝統的権威と協調する路線をとったが、新興勢力の反発を買った。その代表ともいえる高師直と激しく対立した。

高師直

（？～1351）

足利尊氏の執事。尊氏を軍事面で支え、鎌倉倒幕や南朝との戦いで多くの武功を挙げた。室町幕府初期に足利直義と対立し、一時は直義を追って実権を掌握したが、1351年、直義に属した上杉能憲によって一族とともに討たれた。

太平記

南北朝時代の軍記物語で、作者は小島法師と伝えられるが未詳である。後醍醐天皇の即位に始まり、鎌倉幕府の滅亡、建武新政の完成と崩壊、南北朝の対立、細川頼之の管領就任までの50数年間の動乱を南朝側の立場から描く。この時代の通史としてはもっとも普遍的な史料であるが、その信憑性を疑問視する声もある。